

俳優、有限会社青空市場 代表
永島敏行

ながしま としゆき

1956年10月21日千葉県千葉市生まれ。1978年専修大学文学部卒。俳優として映画・舞台・TVに出演。その一方で秋田県で米作りに携わり、農家と消費者をつなぐ「青空市場」の代表も務める。

生田キャンパス 10号館にて

「農業を通して、自分と違う価値観が学べた。役者だけやっていたら駄目だったかもしれない。農業をすることで役者としても、人間としても成長できた」と永島さん。専大生だった21歳で映画デビュー。以来、第一線で活躍してきた。その一方で、30代からは秋田県で米作りに携わり、いまでは生産者と消費者を結ぶ活動にも力を入れている。「思いついたらまずは行動してきた」という永島さんに、学生時代から現在に至るまでの歩みをお伺いした。

思いついたことは行動してみる

🎬 台本を読んで感情で動く

— 大学では準硬式野球部に所属。野球一筋だった永島さんが映画デビューしたきっかけは？

昭和一ケタ生まれの両親にとって唯一の楽しみは映画でした。大学2年の2月、下宿先に父親から電話がかかってきて、映画『ドカベン』のオーディションに書類出しといたから行ってこいと言われました。なんで俺が、と思いましたが、遊び半分で受けたら、受かっちゃったんですね。それが始まりです。

— 大学時代に出演した2作目の『サード』で新人賞を総なめにし、高い評価を受けました。演じることは難しくなかったですか。それまでの演技経験は？

演技の経験はゼロ。お遊戯もしたことがない。人前で何かするといったら野球ぐらい(笑)。でも親の影響で映画が好きで、たくさん名画を見ていたというのがよかったと思うんです。

当時はATGなど若手監督が低予算で実験的な映画を作っていた時代で、映画界にエネルギーがありました。そういう意味では、時代が僕を使ってくれた。演技が上手い下手より、リアル感が求められた。よく監督に言われたのは「お前に演じる技はない。でも感ずることはできる。台本を読んで、そのときの感情で動け」と。その教えがよかったです。

— 『ドカベン』『サード』と偶然にも野球に関係する役ですね。

野球はそんなに上手くなかったけど、芸は身を助いで、ずっとやってきてよかったなど。準硬式野球部の仲間はお前が役者になれるんだったら俺たちだってなれるって言っていました(笑)。映画界に入って思ったのは、部活のほうがよほど厳しかったということ。

— 役者のきっかけを作ったお父さんの反応は？

いたずら好きな親でしたからノリで応募したんでしょうが、まさか受かるとは思っていなかった。僕が役

者にのめり込んでいったら、今度は逆に「家業の旅館はどうなるんだ」って(笑)。旅館は結局たたんでしまいました。

—どのようなご両親でしたか？

子供にはすごく愛情を注いでくれたと思います。そういう意味では、僕も親になって、子供をどう育てるかというのが一つのテーマだった。

—子育てと秋田で農業を始めた時期は重なります。

子供の本分は遊ぶことだと思いますが、東京で泥だらけになって遊べるような場所はないです。知り合いの子供も含め多いときでは30、40人連れて、東京から秋田に行っていました。食も言葉も文化も違う場所で、子供も大人も一緒になって働きながら、いろんな価値観を学べたと思います。

生産者の顔が見える野菜を

—25歳で出演した映画『遠雷』は、都市化が進む郊外で農業を営む若者の話でしたね。

出演したときは、後に農業に取り組むことになると思っていませんでした。栃木が舞台ですが、生まれ育った千葉にも重なりました。経済的には豊かになっていく一方で、町が一様に都市化していくつまらなさ、繁栄とそのしっぺ返しというものを『遠雷』では表したかった。

—秋田県で米作りを始めたのは、「あきた十文字映画祭」で実行委員を務めたことがきっかけでしたね。

最初は農家の人から「なんでわざわざ、旅費までかけて米作りに来るの」と言われていました。その頃、農業は減反政策などマイナスの要素が多く、継がせたくないという人も多かった。僕らが子供と田植えしていると、農家の子供が田んぼに入らずそれを畦から見ているような状況でした。でも続けていると、農家の人も「自分たちがやっている農業ってすごいことなんだ」と、お互い価値観が交錯し合い気づくことがありました。

鳳祭のイベントに出演

11月4日(土)、鳳祭の特別企画「おにぎり食べて日本を救え！」にゲスト出演し、地方の魅力について語った。



↑来場者の質問に答える永島さん

—いまでは一般的になったマルシェの先駆けでもあります。「青空市場」を立ち上げ、農村の生産者と都市部の消費者を結びつける活動を始めた動機は？

農家の人がせっかくだいいものを作っても、流通に乗ってしまうと生産者の顔が見えなくなった。こんなに美味しいものなら直接売った方がいいんじゃないかと思い、銀座のど真ん中に土の付いた大根などの野菜を持っていったのが始まりです。15年前にボランティアで始め、会社を立ち上げて12年になります。各地の知り合いや、農水省の外郭団体も賛同してくれ、全国の生産者が集まりました。

—ビジネスとして儲かっていますか。

生産者のなかには、一日40万円近く売り上げる人もいますが、うちはボランティアで出店料を得ているだけなので、マルシェだけでは儲かりません。持ち出しもかなりありました。関連したイベントをするなどして利益につなげています。人に求められる仕事というのは長続きする。そこで学びながら、収益の方法を考えていければと思うんです。手ごたえはあります。

—今後の夢は？

役者としては、歳を重ねて年代に応じた役を演じられるのが楽しみです。マルシェにおいては、ネット販売や移動販売など、需要のあるところに野菜や魚を届けるといったこともやっていきたいし、人材を育成して地方に送り込むなんてこともやっていきたい。いろんな可能性があると思います。

—学生にメッセージをお願いします。

農業や流通に関してはド素人の自分がやってきたことで、業界を少し変えることができました。思いついたことは行動してみることが大事。いまの時代、ちょっと調べればこう失敗するかもしれないと先が見えて、やりたいことをやめてしまうことがある。でもやりたいことはやってほしい。僕は61歳になったいまも役者としても伸びていきたいし、マルシェも広げていきたい。そういう意味では夢をもって自分を変えていく。夢がないと生きていてつまらないですよ。



↑イベント終了後、他の出演者、大学教職員、限界集落の活性化に取り組む森本ゼミの学生と記念撮影